



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

42

堀 辰 雄

中央公論社

日本の文学 42

©1964

堀 辰 雄

昭和39年9月5日初版発行
昭和49年7月31日32版発行

発行者 高 梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 株式会社トープロ
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 株式会社トープロ
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 有限会社美濃羽製函所
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

詩	9
ルウベンスの偽画	13
窓	26
然ゆる頬	30
聖家族	40
恢復期	58
美しい村	75
風立ちぬ	117

菜穂子

178

かげろうの日記

270

ほととぎす

301

姨捨

330

曠野

341

花を持てる女

352

大和路・信濃路

樹下

371

十月

374

古墳

395

斑雪

橋の上にて

辛夷の花

浄瑠璃寺の春

「死者の書」

雪の上の足跡

ブルウスト雑記

リルケ雑記抄

或外国の公園で

「鎮魂曲」

雉子日記

404

414

419

423

428

434

440

454

456

雉子日記

続雉子日記

ノオト

夏の手紙

小説のことなど

更級日記など

伊勢物語など

黒髪山

注解

解説

年譜

遠藤周作

521 506 494 489 485 483 475 469 467 464 459

口 絵
挿 画

「堀辰雄詩集」

深沢紅子

「詩」「ルウベンスの偽画」「燃ゆる

頼」「聖家族」「恢復期」「美しい村」

「かげろうの日記」「花を持てる女」

「雉子日記」

深沢紅子

「風立ちぬ」「菜穂子」

岡鹿之助

「大和路・信濃路」

恩地孝四郎

堀

辰

雄

詩

天使達が……

天使達が

僕の朝飯のために
自転車で運んで来る

パンとスウプと
花を

すると僕は

その花を揺って
スウプにふりかけ

パンに付け
そうしてささやかな食事をする

*

この村はどこへ行っても
いい匂がする

僕の胸に

新鮮な薔薇が挿してあるように
そのせいか この村には
どこへ行っても犬がいる

*

西洋人は向日葵より背が高い

*

ホテルは鸚鵡

鸚鵡の耳からジュリエットが顔をだす
しかしロミオはおりません
ロミオはテニスをしているのでしょう
鸚鵡が口をあけたら
裸の黒ん坊がまる見えになった

軽井沢にて

絵はがき

1

汽車の中だった。
私のまん前に、一人の子供がすやすやと眠っていた、

手を果実のように垂らしながら。

その手の甲には、青い静脈が、地図のように浮んでいた。

そして私はと云えば、それを無気味な死の地図のように眺めていた。

2

——トンネル……

——風景……

——トンネル……

——風景……

またトンネルだ。

今度の奴はばかに長いんだなあ。

おや、私はいつ眠っていったんだろう！

3

私の自動車は、断崖だんがいの上を通り過ぎた。

その下には、激流があった。

——水が物凄く渦うずをまいていた。

そしてそこから聞えてくる音響は、私に死の工場のモ

オタアの音を思わせた。

4

私は山の中にはいつて行った、

死を追跡しながら。

なんでも死は瀑布ばふに変装しているのだそうだ。

だが私は、その笑い声を、かすかに聞いただけだった。そして、どうしても彼女を発見することは出来なかつた。

た。

そのかわりに、私は、山の奥の、白い石の上に、一匹の怪奇な縞しまのある蜥蜴とくげが、眠っているを見つけた。

おお、これは死の足跡だ！

5

村の郵便局で。

私は絵はがきに、こんな悪戯いたづらがきをしていた。

私はその一枚の上に、誤ってインクをこぼした。

するとそれが蜥蜴の恰好かっこうになり、

そして不器用に死の足跡を偽造した。

私はいまいまいげに舌を出した、

切手を貼るためのように装って。

——湯ヶ島にて



僕は

僕は歩いていた
風のなかを

風は僕の皮膚にしみこむ

この皮膚の下には
骨のヴァイオリンがあるというのに
風が不意にそれを
鳴らしはせぬか

*

硝子の破れている窓
僕の蝕歯よ

夜になるとお前のなかに
洋燈がともり
じつと聞いていると
皿やナイフの音がしてくる

病

僕の骨にとまっている
小鳥よ 肺結核よ

おまえが嘴で突つくから
僕の痰には血がまじる

おまえが羽ばたくと
僕は咳をする

おまえを眠らせるために
僕は吸入器をかけよう

*

苦痛をごまかすために
僕は死にからかう
犬にでもからかうように

死は僕に噛みついて
彼の頭文字を入墨しようと
歯を僕の前にむき出す

ルウベンスの偽画

それは漆黒^{しちく}の自動車であつた。

その自動車が軽井沢ステーションの表口まで来て停^とまると、中から一人のドイツ人らしい娘を降^{おろ}した。

彼はそれがあんまり美しい車だったのでタクシイではあるまいと思つたが、娘がおるとき何か運転手にちらと渡すのを見たので、彼は黄いろい帽子をかぶつた娘とすれちがひながら、自動車の方へ歩いて行つた。

「町へ行つてくれたまえ」

彼はその自動車の中へはいつた。はいつて見ると内部は真白^{ましろ}だつた。そしてかすかだが薔薇^{ばら}のにおいが漂^{もよほ}つていた。彼はさつき無造作にすれちがつてしまつた黄いろい帽子の娘を思い浮べた。自動車がぐつと曲つた。

彼はふと好奇心をもつて車内を見まわした。すると彼は軽く動揺^{どうご}している床の上にしちらされた新鮮な睡^ねのあとを見つけたのである。ふとしたものであるが、妙に荒あらしい快さが彼をこすつた。目をつぶつた彼には、そ

れが攪^{かき}りちらされた花卉^{かぎ}のように見えた。

しばらくしてまた彼は目をひらいた。運転手の背なかが見えた。それから彼は透明な窓硝子^{まきどす}に顔^{かほ}を持つて行つた。窓の外はもうすっかり穂^ほを出している芒原^{まきば}だつた。ちょうど一台の自動車がすれちがつて行つた。それはもうこの高原を立ち去つてゆく人々らしかつた。

町へはいろうとするとところに、一本の大きい栗^{くり}の木があつた。

彼はそこまで来ると自動車を停めさせた。

*

自動車は町からすこし離れたホテルの方へ彼のトラックだけを乗せて走つて行つた。

そののあげた埃^{ほこり}が少しずつ消えて行くのを見ると、彼はゆつくり歩きながら本町通りへはいつて行つた。

本町通りは彼が思ったよりもひっそりしてゐた。彼は毎年すつかりそれを見違えてしまうくらいだつた。彼は毎年この避暑地の盛り時にばかり来ていたからである。

彼はしかしすぐに見おぼえのある郵便局を見つけた。

その郵便局の前には、色とりどりの服装をした西洋婦人たちがむらがつていた。

歩きながら遠くから見ている彼には、それがまるで虹^{にじ}のように見えた。

それを見ると去年のさまざまな思い出がやつと彼の手中にも蘇^{よみがえ}って来た。やがて彼には彼女たちのお喋^{しゃべ}りが手にとるように聞えてきた。彼は彼女たちのそばをまるで小鳥の囀^{さえず}っている樹の下を通るような感動をもつて通り過ぎた。

そのとき彼はひよいと、向うの曲り角を一人の少女が曲つて行つたのを認めたのである。

おや、彼女かしら？

そう思つて彼は一気にその曲り角まで歩いて行つた。そこには西洋人たちが「巨人の椅子」と呼んでいる丘へ通ずる一本の小径^{こみち}があり、その小径をいまの少女が歩いて行きつつあつた。思つたよりも遠くへ行つていなかった。

そしてまちがいなく彼女であつた。

彼もホテルとは反対の方向のその小径へ曲つた。その小径には彼女きりしか歩いていないのである。彼は彼女に声をかけようとしてなぜだか躊躇^{ためら}をした。すると彼は急に變な氣持になりだした。彼はすべてのものを水の中のように空氣の中で感ずるのである。たいへん歩きにくい。おもわず魚のようなものをふんづける。彼の貝殻^{かいがら}の耳をかすめてゆく小さい魚もいる。自転車のようなものもある。また犬が吠^ほえたり、鶏が鳴いたりするのが、はるかな水の表面からのように聞えてくる。そして木の

葉がふれあつているのか、水が舐^なめあつているのか、そういうかすかな音がたえず頭の上でしている。

彼はもう彼女に声をかけなければいけないと思う。が、そう思うだけで、彼は自分の口がコルクで栓^{ふた}をされているように感ずる。だんだん頭の上でざわざわいう音が激しくなる。ふと彼はむこうに見おぼえのある紅穀^{べいこく}色のパンガロオを見る。

そのパンガロオのまわりに緑の茂みがあり、その中へ彼女の姿が消えてゆく……

それを見ると急に彼の意識がはっきりした。彼は彼女のあとからすぐ彼女の家を訪問するのは、すこし工合が悪いと思つた。しかたなしに彼はその小径を往つたり来たりしてゐた。いいことに人はひとりも通らなかつた。そうしてようやく「巨人の椅子」の麓^{ふもと}の方から近づいてくる人の足音が聞えたとき、彼は何を思つたのか自分でも分らずに、小径のそばの草叢^{くさむす}の中に身をかくした。彼はその隠れ場から一人の西洋人が大腿^{おももと}にそして快活そうに歩き過ぎるのを見ていた。

彼女はまだ庭園の中にいた。彼女はさつき振りかへつたときに彼が自分の後から来るのを見たのである。しかし彼女は立止つて彼を待とうとはしなかつた。なぜかそうすることに羞^{はにか}しさを感じた。そして彼女はたえず彼の